
艦魂ともうひとつの日本海軍史外伝 河用砲艦「羽州」型

火龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂ともうひとつの日本海軍史外伝 河用砲艦「羽州」型

【Nコード】

N1174Y

【作者名】

火龍

【あらすじ】

本作は「艦魂ともうひとつの日本海軍史」の外伝であり、本編第七十六話「米砲艦の最期」に登場した「羽州」型砲艦の生涯を描いたものです。彼女たちは「内地」と呼ばれた日本本土の防衛ではなく、清国（後には中華民国）に滞在する日本人の生命や財産を護るために建造され、その生涯の大半を大陸で過ごすことになりました。外伝という慣れない形式での執筆とはなりますが、どうかご期待ください。

第一話 海の領事館

日露戦争後、日本は清国国内における權益を拡大。それに伴い少なくない数の日本人が大陸へと渡っていったが、当時の清国は国内の警察さえまともに機能しておらず、何らかの対策を講じなければ現地にいる日本人の安全が脅かされることは明白であった。

そこで日本は、勇の提案もあつて英仏に続き河用砲艦と呼ばれる軍艦の建造を決定。河用砲艦とは黄河や長江を初めとした川を遡行できるよう喫水が浅いという特徴を持つており、長江の場合は一八九七年に浸水したイギリス海軍砲艦「ナイチンゲール」級四隻がその先駆けと言われている。

なお「ナイチンゲール」は排水量八五トン、全長三三メートル、喫水〇・六メートル、速力九ノット、五七ミリ砲二門という要目である。軍艦としては極めて非力であると言わざるを得ないが、目的は専ら自国区民及び自国權益の保護と威嚇であつたため、この程度でも十分であつた。

日本は史実において、当初「宇治」（初代、常備排水量六二〇トン）や「嵯峨」（同じく七八五トン）といった比較的大型の河用砲艦を整備していた。ところが喫水が二メートル以上ある彼女たちでは遡行できる範囲に限界があり、後には「勢多」型（常備排水量三三八トン）や「熱海」型（基準排水量二〇六トン）等の小型砲艦ばかりを整備するようになっていったのである。

勇はこの事実を踏まえ、河川の貨物運搬用に開発された一二五トン級指定船の基礎設計を流用してはどうかと提言。小型艦では心理的な抑止効果に劣り、自国民及び權益の保護という効果が不十分な

ものになるのではないかという意見もあったが、イギリスが清国に派遣している砲艦がほとんど二百トン前後かそれ以下の小型艦であると伝えられると、反対は弱まっていた。

こうして、以下の要目で「羽州」級砲艦十二隻の建造が決定。当時砲艦の名には名所旧跡の名が付されていたが、軍艦の中に河用砲艦の類別が新設されるとともに、任務の重要性や国威発揚の面から「州」の字がつく旧国名の別称がつけられることになり、一九一〇年の「羽州」を皮切りに三年間で一二隻が就役した。

全長三五メートル、幅七メートル、深さ一・七五メートル、喫水〇・七メートル

基準排水量一二五トン、満載排水量一五〇トン

重油専焼缶二基、レシプロ二基二軸、六〇〇馬力

速力一五ノット、航続距離一〇ノット（二四〇馬力）で二八八〇海里、燃料搭載量一八トン

・居住設備

士官、特務士官及び准士官合計三名（予備士官室含む）、下土官兵三六名

・兵装

五〇口径単装三インチ砲二基二門（船首楼、艦尾）

七・七ミリ単装機銃四基四門（艦橋左右に二門ずつ）

貨物船を基にしたため艦尾に四層の艦橋があるという特異な艦型であり、船首楼と艦橋の間には長さ一七・五メートルに亘って平らな甲板が広がっていた。これは河用砲艦に特徴的な大型の艦上構造物を無くすことで凌波性の向上をもたらすのと引き換えに、艦内容積の縮小による居住性の悪化という弊害もあったが、艦内に居住設備の大半を備えることで事なきを得た。

本来河用砲艦というものは、居住区を全て艦上構造物に集約し、船体内部には半埋め込み式の機関室以外の区画を設けない。だが「羽州」型は船体の深さを増したことで、機関室のみならず倉庫や居住区も船体内に収めることができ、また満載時にも乾舷が一メートルを超えたために内地への航行も不可能ではなかった。

武装については船体の縮小に合わせた妥協が為され、三インチ砲二門を艦橋の後方と船首楼上に装備。また艦橋部分には七・七ミリ機銃四門が据えられ、歩兵や軽車両といった目標に対処することが想定されていたが、将来的には対空火力の向上も兼ねて二〇ミリ機銃に換装予定であった。

また貨物船を基にしているため、船内には船首楼の直後から長さ一〇・五メートルに亘る貨物倉があり、ここに数十トンの物資や兵員二個分隊を乗せることができた。このことが結果として彼女たちの汎用性を大きく高め、辛亥革命や軍閥の掃討において大きな効果を発揮することになるのだが、当時は設計者の勇自身でさえ予想していなかった。

これらの特徴を有していた「羽州」型は、一番艦の「羽州」が佐世保海軍工廠において一九〇九年四月一日に起工し、半年後の九月三十日に進水。彼女の進水式には、当時海軍中尉であった勇も参列することになった。

第一話 海の領事館（後書き）

作者「連載が始まったはいいいけれど、この話で一ヶ月持つかどうかさえ疑問だよ」

富士「で、後は裏方の架空兵器ばかり外伝形式で取り上げていくつもりか？」

作者「本作に殆ど登場しなかったとはいえ、魚雷艇や特殊な潜水艦の話は考えてあります。加えて砕氷艦や小型潜水艇、モニターの設定も考えてはありますが、艦魂のネタが浮かばず手詰まりとなっております」

敷島「いつそ、どこかのアニメや漫画からパク……もとい、参考にしてくればいいんだよ」

作者「それができればいいのですが、中学時代からは小説はおろかアニメや漫画も数作品しか触れずに、軍事にはかり傾倒していません。ましてや、ある種のゲームのように女性の登場人物が何人も出てくる作品なんて、それこそ『ガンダム』シリーズぐらいしかまともに見たことがありません」

三笠「その『ガンダム』シリーズも。架空の世界観とは言えある種の軍事関連だと思っのですが……それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、砲艦『羽州』の艦魂が登場しますが……次回『船体も艦魂も変わり者』ご期待ください」

第二話 船体も艦魂も変わり者

一九〇九年九月三十日、佐世保海軍工廠。

「少し、違和感があるけれど……仕方ない、か」

勇が、艦首から「羽州」の艦橋を見上げてそう呟く。基本設計の流用による建造の簡易さや実用性を重視したためとはいえ、既存の河用砲艦とあまりにもかけ離れた彼女の艦型は、設計者の勇自身さえ違和感を覚えるものであった。

むしろ艦装で砲や機銃が装備されていない現在では、他の一二五トン級指定船との差異を見つけることは困難であり、例えここから貨物船に作り直したとしても延長される後期は精々一カ月といったところであった。それほどまでに、「羽州」型砲艦は一二五トン級指定船の特徴が色濃く残っていたのである。

「有馬中尉、もう乗艦なさっていたのですね」

「おお、大隅か」

姉妹艦四隻の竣工に伴い、慣熟訓練を終え第一艦隊に編入されて佐世保に來航していた戦艦「大隅」の艦魂、大隅が勇の近くに現れる。なお「三笠」、「富士」、「敷島」及び「朝日」の四隻は、「鹿島」及び「香取」とともに第二艦隊に所属し、主に舞鶴方面で活動中である。

「船体が非常に浅いですが……清国まで回航できるのですか？」

「対馬海峡と済州海峡を通って黄海を北上した後、一先ず旅順に寄港することになる。黄河や長江に出向いてもらうのは、それからだ」

二人が会話している間に時間は過ぎていき、進水時刻が近づいているという旨が伝えられ、二人は艦橋二階の右舷艦首側にある予備士官室に待機。そしてついに船台へと注水が始まり、暫くして「羽州」の船体が浮かび上がった。

直後、船首楼の上に閃光が灯る。その光が消えた後には、短髪で十代半ばぐらいに見えるややあどけない顔つきの、小柄な艦魂が立っていた。

「彼女が、この艦の艦魂のようですね……それでは、連れて参ります」

「ああ、頼んだよ」

立礼をして船首楼へと瞬間移動した大隅は、羽州と暫く言葉を交わしてその場から消える。すると羽州は大隅に付き添われ、直接予備士官室へとやってきた。

「お初にお目にかかります。大日本帝国海軍羽州型砲艦一番艦、『羽州』の艦魂です。あなたが、大隅長官の仰っていた有馬中尉ですね？」

大隅と同じように丁寧ではあるが、羽州はどこか彼女と異なり、警戒心が見え隠れする口調で話す。目つきも富士ほどきつくは無いものの、視線は鋭かった。

「ああ。でも、そんなに緊張しなくても……大丈夫？」

「私にとっては……これが、普通の話し方ですから。無愛想だと思われたのであれば、申し訳御座いません」

謝意を告げて頭を下げる様子も、どこか余所余所しい。勇個人としてはこの程度で咎める気にはならなかったものの、清国に派遣される砲艦という任務の都合上日本のみならず清国や欧米の艦魂と会う機会も想定される彼女の立場を考えると、このままでは艦魂同士でいさかいを起こすことも考えられた。

とはいえ、自分がこの場で羽州に注意をしたところで、生まれつきの性格を変えられるとは考え難いこともまた事実であった。こう考えた勇は、大隅に手招きをし、近くにやってきた大隅にこう耳打ちした。

「あの様子だと、外国艦魂との交流に支障が出かねない。僕が今言っただけでは聞いてくれないかもしれないから、後々大隅から言うておいてくれないか？」

「確かに、由々しき問題ですね……了解です」

目の前でひそひそと話す二人を見た羽州は、当然何事かと不審がる。だが良くも悪くも慎重な彼女は、新参者である自分が関わってよい事柄なのではないのだろうと自分を納得させると、そのまま黙ってその場に立っていた。

その後勇は大隅と二人で今後の予定などを伝え、艀装用の棧橋に繋留された「羽州」から下艦。一抹の不安を胸に、今後発生するであろう辛亥革命や欧州大戦（第一次世界大戦）への対策を講じるべく、鉄道で東京へと戻っていった。

第二話 船体も艦魂も変わり者（後書き）

作者「南無三。本編で決定的な勘違いがあった」

富士「何があった?」

作者「欧州大戦の際、青島にいたドイツ海軍艦艇を駆逐艦『ターク
ー』と水雷艇『S90』のみであると書いていたのですが……河用
砲艦の存在を無視していたようです」

敷島「で、どうするの?」

作者「最初は進退窮まったドイツ軍が第一艦隊の侵攻前に中国へ売
り渡したとか、いろいろ考えたのですが……他国とは言え船に身売
りをさせるような真似は好きではないので、別の方法で辻褄を合わ
せようと思います」

三笠「別の方法って、まさか……それはともかく、次回予告をお願
いします」

作者「次回、羽州に続いて妹が登場します。次回『真逆の性分』ご
期待ください」

第三話 真逆の性分（前書き）

登場人物解説

羽州（羽州型河用砲艦一番艦）

身長 一五六センチ

外見の年齢 十代半ば

同型艦 十二隻（全て建造中）

実直で朴訥な、河用砲艦の艦魂。警戒心や猜疑心を抱きやすく、それ故に口調も自ずと無愛想な、ともすれば怒っているような印象を相手に与えかねないものとなっている。勇や大隅からは彼女が河用砲艦ということもあって心配をされるが、羽州自身はそれを自覚しながらも直すに直せない。

第三話 真逆の性分

それから月日は流れ、第一陣として建造されていた「羽州」「陸州」「豊州」及び「紀州」の四隻が相次いで竣工。一九一〇年三月一日に、四隻はイギリス製の河用砲艦である「宇治」「隅田」及び「伏見」らが待つ旅順に向け佐世保を出港した。

出港翌朝、砲艦「羽州」船首楼。ここで、日本を後にした羽州が艦首の三インチ砲に右手を突きながら、一人物思いに耽っていた。

「私たちの任務は、清国内における日本の權益や国民の保護。なら、次におそらく私が本土に戻るのは……解体されるとき」

自らの死について考えているとは到底思えないほど淡々と、羽州は自らの憶測を呟く。警戒心が強く、どこか超然とした態度は、進水以来大隅による再三再四の助言を聞いてなお変わっていないかった。

「大隅長官、申し訳御座いませぬ……私の性分は、おそらく暫くはこのままであると思われませぬ」

「羽州姉さん、何ぼそぼそ言ってるの？」

「ちつ……豊州」

いつの間にか妹に背後を取られていたと知り、羽州は周囲への注意がまるで払えていなかったことへの自戒の念を込めて舌打ちをする。自分より一月遅れで生まれたこの妹を、羽州は非常に苦手としていた。

彼女は羽州型砲艦三番艦「豊州」の艦魂、豊州である。身長が五尺程度で、顔つきも鼻眞目に見たところで十代半ばといったところ

ではあったが、性格や言動が小さな敷島のようにであり、実直で口数の少ない羽州から見るとまさしく最悪の相性であった。

「私たちの将来について考えていた……ただ、それだけ」

「ふーん。真面目だねえ」

「私は、姉妹十二隻の旗艦も務めなければならない。旗艦として当然のこと」

自分の思案を妨害された羽州は、言葉の端々に早くどこかへ行つてほしいという苛立ちを隠せない。だがそんな姉の心の内を知つてか知らずか、豊州は一向に話しかけることを止めようとはしなかった。

「外国の艦魂つて、どんな艦魂だろうね？」

「分からない。でも、私はどんな艦魂が相手であろうとも、私情で任務を潰すような真似はしたくない」

終始ぶっきらぼうな姉に、豊州は機嫌を損ねる。彼女としては悪気は無く、純粹に姉との親交を深めたかっただけであるのだが、肝心の羽州がこの態度では、豊州としても如何ともし難かった。

「……そう、わかった」

豊州は寂しそうな表情で「羽州」を後にしたが、先程から体勢を変えず彼女に背を向けたままの羽州には、それを知る術がない。ただただ、これからの任務に不安と使命感を交錯させながら、目の前の海を見つめるだけであった。

三日後の三月十八日、四隻は日本の租借地である旅順へと到着。イギリス製の砲艦三隻からなる第四一戦隊（河用砲艦による戦隊は

四十番台の番号がつけられることになった)が旅順そのものの警備を主任務とするのに対し、「羽州」型四隻の第四二戦隊は黄河の警備を請け負うことになった。

中でも「羽州」と「豊州」が第一小隊、「陸州」と「紀州」が第二小隊をそれぞれ構成。常にどちらかの小隊が黄河に常駐することとされ、第一小隊は補給を終え次第、旅順到着の二日後には黄河へと向かっていった。

三月二十二日、第四一戦隊第一小隊は黄河河口に到着。念のため名目上は清国の許可を取った上で、緊急時にどこまで黄河を遡行できるか試すべく、機関に不要の負担をかけない範囲での実験が行われることになった。

とはいえ、この申し出は飽くまで形式的なものに過ぎないと言える。当時の清国はアヘン戦争や日露戦争に追って国家としての威厳を失墜させており、また日本や欧米列強の要求を撥ねつけるだけの軍事力も持っておらず、ほぼ断りようが無かったからだ。

「最初の正念場まで、あと一年半といったところ……短い、それまでに詰めるだけの経験を積んでおかなくては」

佐世保を離れる前、羽州には大隅から辛亥革命の内容が粗方伝えられていた。その生真面目な性格から、羽州は最初大隅の頭がおかしくなったのかとさえ考えていたが、後に再び佐世保を訪れた勇にまで同じことを言われては納得せざるを得なかった。

二隻がこれから遡行する黄河の流速は、華北平原と呼ばれる地域を流れている間はさほど速くない。ところが鄭州と呼ばれる街の側を通り、太行山脈や秦嶺山脈がある山岳地帯にさしかかると、急に

流速が増すのである。

そこで、試験航行の目標は山岳地帯に入って間もなくの洛陽と決定。事と次第によっては「羽州」型砲艦そのものの価値を決定づけかねない、日本海軍艦艇として初の黄河遡行が、今始まったのであった。

第三話 真逆の性分（後書き）

富士「船体といい艦魂といい、この羽州とやらは河用砲艦としてどうなのだ？」

作者「かといって、豊州のように無邪気かつ無遠慮……というのも困りものですけどね。船体は……使い勝手の良さや生産性を重視しすぎたらこうなりました」

朝日「まさか、一から砲艦を設計するのが面倒だったのではありますまいな？」

作者「それも、一理あるような気がしないと言えば嘘になるかもしれない、とだけ言っておく」

三笠「やたらと長ったらしい言い訳はともかく、次回予告をお願いします」

作者「次回、羽州の堪忍袋の緒が切れかかります。次回『突きつけられた最後通牒』ご期待ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1174y/>

艦魂ともうひとつの日本海軍史外伝 河用砲艦「羽州」型

2011年11月5日06時12分発行